



市政羅針盤

市長が自ら、市政運営の方針を分かりやすくお伝えします。 〇秘書課 ☎ 36-7117

今月のテーマ 「どうすれば水を守れるのか」 リニア工事を巡る現在の状況

6月26日、川勝知事とJR東海金子社長のトップ会談が行われ、「6月中に着工しないと27年の開業は難しくなる」としてJR東海が強く要請したヤード用地の造成(準備工事)について、「容認しない」方針が伝えられました。

これは、県知事と10市町首長とがウェブ会議で一致した「国の有識者会議の結論が出る前に追加工事に同意するのは時期尚早」との見解を踏まえた回答であり、

県と流域市町の認識にズレはないことを示す結果でありました。しかしながら、このトップ会談の直後、市役所で記者団に囲まれた私は、「核心を突く議論にならず残念。JR東海には流域の思



さわらしま 榎島導水路トンネル計画地付近

いをくみ取ってほしい」と答えていました。

会談では、残念ながらヤード工事は是非をめぐる科学的・技術的な議論にならず、「環境保全協定」の手続き論のようなかみ合わない話になってしまったからです。知事は、会談後の記者会見で「ヤード工事は認めない」と改めて発言されておられます。会談を視聴した方々は、県とJR東海は何を揉めていて、どのように解決したいと思っているのか、具体的な論点が見えなかったと思います。「水が大事だ」ということは誰にでも分かります。その水をどうすれば守れるのかを、私たちは知りたいのです。

いま私は「命の水は譲れない」というテーマエ論だけでは、大井川の水を守れないと考えています。リニア工事に伴う水問題も、南アルプスの生態系や環境問題も、今後は具体的に何が心配で、どんな課題があるのか、県と流域市町は何を求めているのか、それらについて解決策はあるのか。具体的に話し合い、解決への道筋を分かりやすく示す必要があります。

この流域は、大井川の恵みで繁栄してきました。そして、この大井川の水に、未来の盛衰もかかっています。これ

まで繰り返し申し上げている通り、私たちはリニアに反対しているわけではありません。ただ、大井川流域の命の水を守りたいだけなのです。

皆さんは覚えておられるでしょうか。1960年、塩郷えん堤が完成した直後から下流の大井川は流水が途絶えて「河原砂漠」と化しました。流量復活を求めて地元住民らは「水返せ運動」を起こし、1989年(平成元年)に一定量の水(夏場3t/秒、冬場5t/秒)を戻すことを中部電力に認めさせて、大井川の流が復活した歴史があります。大井川の水は、先人たちの血のにじむような努力で守られてきたのです。

「昔は毎日のように川で泳いでいた」と年配の方が懐かしむ大井川の流れは、上流にできた15のダムによってやせ細り、本来の川の機能を失ってしまったと嘆く住民も多くいます。加えてリニア工事によって、山梨・長野両県へ流出してしまうトンネル湧水をどう大井川に戻すか、水質は維持できるか、地下水への中長期的な影響はどうかなど、私たちにはたくさんの不安や疑問があります。不確実性のリスクはあっても、JR東海は、科学的データを示してこれらの事柄を丁寧に説明し、住民の理解を得なければ工事の進捗は難しいです。とにかくこの困難を打開するためには、科学的根拠に基づいた誠実な議論が必要です。この夏、リニア中央新幹線をめぐる大井川の水問題は、いよいよ正念場を迎えます。



塩郷えん堤下流の大井川(鷓鴣山の七曲り)